

# 「読解力」向上のための総合的な研究

— 学校における取組と総合教育センターの支援 —

吉田佳恵<sup>1</sup>

学校の教育活動全体での「読解力」向上の取組が求められる中、各学校における取組を更に推進するために、平成18年度に総合教育センターで作成したガイドブックを基に、新たな学習指導案の作成及び授業実践とその検証を行った。また、こうした研究の成果に基づき、データベースや校内研修用資料を作成した。

## はじめに

平成12年よりOECD（経済協力開発機構）は、国際的な学力調査として「PISA調査」を実施している。この調査は、「義務教育修了段階の15歳児が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかどうかを評価」するというものである。調査分野の一つである「Reading Literacy」は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義され、「PISA型「読解力」」と呼ばれている。（以下「読解力」という。）

平成15年実施の同調査結果では、我が国の子どもたちの「読解力」の得点がOECD平均程度まで低下している状況にある等、大きな課題があることが示された。これを受け、文部科学省では、平成17年に「読解力向上プログラム」及び「読解力向上に関する指導資料」を公表し、次のような点について述べ、各学校での取組を求めている。①PISA調査の目的は現行学習指導要領がねらいとしている「生きる力」「確かな学力」と同じ方向性にあること。②PISA調査の結果から明らかになったことと教育課程実施状況調査の結果とは共通点があること。③「読解力」は学校の教育活動全体で身に付けていくべきものであり、教科等の枠を超えた共通理解と取組の推進が重要であること。

こうした中、総合教育センターでは平成18年度に、各学校での「読解力」向上の取組を推進するための研究を行い、『神奈川版：「読解力」向上のためのガイドブック』を作成した。

作成したガイドブックについては、総合教育センターWebページへの掲載、県内の公立小学校・中学校等への配付及び総合教育センターにおける研修講座等での活用により、普及を図ることとしたが、平成19年度は、各学校での「読解力」向上のための取組を更に推進するために、総合的な研究を行うこととした。

## 研究の目的

本研究の目的は、各学校における「読解力」向上の取組を更に推進するために、平成18年度の研究に関する検証を行うとともに、総合教育センターとしての研究成果の普及のための方法を考案することである。

具体的には、平成18年度に総合教育センターで作成した『神奈川版：「読解力」向上のためのガイドブック』を踏まえ、新たな学習指導案の作成及び授業実践とその検証を行うとともに、「読解力」向上のためのデータベース及び校内研修用資料の作成を目指した。

## 研究の内容

平成18年度に総合教育センターで作成した『神奈川版：「読解力」向上のためのガイドブック』（以下「ガイドブック」という。）の内容は次のとおりである。

### 【第1章】「読解力」とは何かについての説明

- ①PISA調査及び文部科学省の「読解力」向上に関する資料について
- ②それらを踏まえ、実践的に整理した「読解力」向上のための〈四つの力〉及び対象とするテキストについて

### 【第2章】「読解力」向上のための二つの方法

- ①-1 スキルの整理とスキルモデルについて
- 2 学校全体で取り組むためのコンセプトモデル〈三つのS〉について
- ②「新たな学習指導案のフォーマット」について

### 【第3章】各学校で取り組む際の手順等

- ①各学校で取り組む際の手順について
- ②「読解力」の評価について

### 【学習指導案編】各教科等の授業での取組

- ①教科等の目標と「読解力」との関連及びテキスト等を説明した「各教科等の学習と『読解力』」
- ②学習指導案60本  
(小学校・中学校の全教科と総合的な学習の時間)

1 カリキュラム支援課 研修指導主事

本研究では、このガイドブックを踏まえ、次の二つの方法で研究を進めた。

- 1 「読解力」向上のための学習指導案の作成及び授業実践とその検証
  - 2 「読解力」向上のためのデータベース及び校内研修用資料の作成
- 研究の内容は次のとおりである。

### 1 学習指導案の作成及び授業実践とその検証

各学校における「読解力」向上の取組を推進するために、ガイドブックには、各教科等の学習指導案を掲載している。この研究成果を踏まえ、各学校における「読解力」向上の取組を更に推進するために、参考例を増やすとともに、より実践的な事例を提示することとした。そこで、(1)新たに学習指導案を作成するとともに、授業実践を行うこととした。あわせて、(2)授業実践を通して、昨年度の研究について、スキルモデルやコンセプトモデルに係る検証を試みることにした。

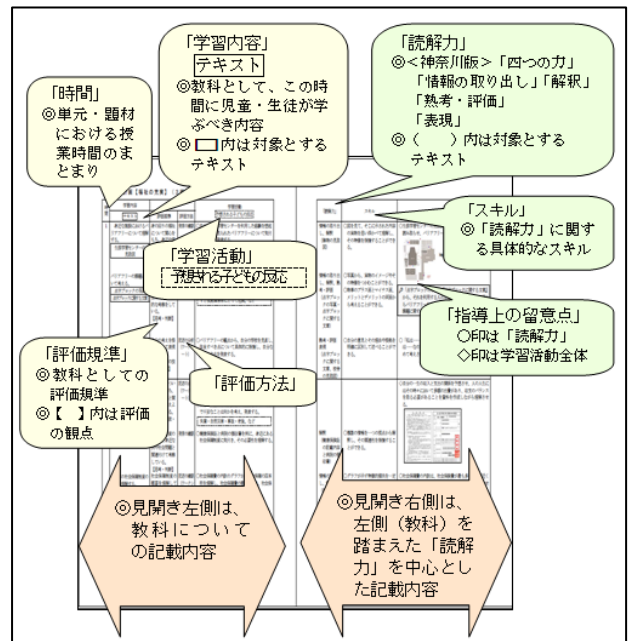
#### (1) 学習指導案の作成及び授業実践

##### ア 作成の方法と手順

本研究では、小学校の四つの教科及び中学校の四つの教科について、調査研究協力員（公立の小学校・中学校の教員）の協力を得て、学習指導案を作成した。

学習指導案の書式については、平成18年度に開発した「新たな学習指導案のフォーマット」を使用した。このフォーマットは、次の三つの内容からなっている。

- ① 1ページ目には、「単元・題材の目標」と並べて「児童・生徒について」（児童・生徒の現状と課題）を明記した上で、評価規準を記載するようになっている。そして、学習指導計画では、教科等における付けたい力を明記し、学習活動の欄には、「読解力」に関する内容を記載するようになっている。具体的には、教科等の学習活動の中で必要な「読解力」に関する力や向上が期待できる力を明記するようになっている。また、読解の対象となるテキストについて記載する欄を設けている。
- ② 2ページ目以降の「授業計画」はA4判・2枚の見開きで、左側は教科の内容について、右側は主に「読解力」を中心とした内容について記載するようになっている。（第1図）右側は、学習活動の中で必要な「読解力」に関する力や向上が期待できる力を明記するとともに、そのスキルを記載するようになっている。また、「指導上の留意点」の欄には、「読解力」に関する内容も記載するようになっている。
- ③ 「授業計画」の後には「本単元・題材の学習と『読解力』」として、学習指導案全体に関して、取り上げたテキストについての説明、取り上げたスキルや指導方法以外の工夫例、授業実践の成果と課題などについて記載するようになっている。



第1図 学習指導案のフォーマット（「ガイドブック」より作成）  
学習指導案の2ページ目以降の「授業計画」の箇所

このフォーマットを使用し、教科の授業における目標及び評価規準を明確にし、児童・生徒の現状と課題を踏まえた上で、単元の授業計画に「読解力」を位置付けた学習指導案を作成した。特に、具体的な手立てを明確にするためにも、学習活動の中で必要であり、その向上が期待できる「読解力」に関する力、それらに関するスキル、対象とするテキスト等についての検討を行った。また、「読解力」向上のためにも発問は重要であることから、ポイントとなる発問については明記するようにした。

検討に当たっては、教科における校種間の円滑な接続を考慮し、教科別に、小学校・中学校合同での研究協議等を行った。

#### イ 作成上の工夫

新たに作成した学習指導案は10本である。（第1表）

第1表 平成19年度に作成した学習指導案

	教科	学年	単元名
小学校	国語	2年生	じゅんじょよくせつめいしよう
	社会	5年生	わたしたちの生活と工業生産
	算数	5年生	小数のわり算（除数が小数）
	理科	6年生	からだのつくりとはたらき
中学校	国語	2年生	随筆「字のないはがき」 人間のきずな
		3年生	詩「わたしを束ねないで」 心の在り方
	社会	3年生	国の政治のしくみ （国会のしくみと働き）
		3年生	市場経済と金融 （価格の決まり方）
	数学	2年生	図形の性質の調べ方（図形の合同）
理科	3年生	酸化と還元	

校種・教科の特性、児童・生徒の実態に応じて、単元の目標を達成するとともに、「読解力」向上のために、様々な工夫がなされたが、校種・教科に共通する主な工夫点は次の四つである。

(ア) テキストについて

できるだけ多様なテキストを用意する。

(イ) 「読解力」に関する〈四つの力〉について

学習活動の中に、「情報を取り出す力」、「解釈する力」だけでなく、「熟考・評価する力」を位置付けるようにする。また、「表現する力」を適宜位置付けるようにする。

(ウ) 「読解力」に関するスキルについて

具体的なスキルを考える。

(エ) その他

グループ活動を取り入れる。

発問や助言を工夫する。

ウ 学習指導案と授業実践についての考察

新たに作成した10本は、いずれもこれまでの授業を踏まえ作成したもので、このうち6本については学習指導案の作成後に授業実践を行った。授業実践については、ビデオによる授業記録、授業参観者による授業記録、学習活動において児童・生徒が記載したもの等を基に、授業者自身の分析を踏まえ、研究協議を行い、成果と課題について整理した。この成果と課題については、学習指導案の最後の項目に記載した。なお、平成18年度に作成した学習指導案については、見やすさにも重点を置き、分量が多くならないように考慮したが、本研究では、工夫点及び成果と課題が明確となることにより重点を置いた。そこで、「授業計画」及び「本単元・題材の学習と『読解力』」の項については、見やすさも考慮しながら詳細に記載することとした。

ここでは、先に挙げた校種・教科に共通する四つの工夫点のうち、(ア)・(イ)・(エ)を取り上げ、学習指導案、特に授業実践に見られる具体的な内容とその成果について考察したことを述べる。(学習指導案については、総合教育センターのWebページ参照。)

(ア) テキストについて

PISA調査では、“書かれたテキスト”を対象としている。文部科学省による「読解力」向上に関する資料においては、“書かれたテキスト”だけではなく、各教科等の学習の対象となるものをテキストとして取り上げ、PISA調査よりもその範囲を広げている。ガイドブックでは、児童・生徒が教科等の学習活動や実生活で直面するものを広くとらえて整理し、書かれたものを始めとして、話していること、映像・音楽・音・絵・写真、実物、状況や様子(自然現象、社会事象、風景、ダンス、球技、表情、パフォーマンス等)としている。ただし、あらゆるものを対象にするのではなく、教師や児童・生徒が切り取ったもの、まとまりのあるもの、文脈のあるものとしている。

本研究で作成した学習指導案では、校種・教科の特性や児童・生徒の実態に応じて、多様なものをテキストとして取り上げている。例えば、文章、ワークシート、メモ、絵本、式(数式、化学式)、図(イメージ図、地図)、表、グラフ、写真、ビデオ映像、実物や物(おもちゃ、鉄鉱石や鉄製品、植物、カード、ブロックによるモデル)、実験、話したことをまとめたもの、身体などである。

学習活動だけでなく、実生活・実社会においても、書かれたもののみが対象となるとは限らず、様々なものを対象として、情報を取り出し、理解し、解釈し、熟考することが必要となる。また、書かれたものだけを単独で扱うとは限らず、様々な種類のものを複合的に、理解し、利用し、熟考することが必要となる。対象とするテキストの種類が異なるということは、そこで必要となる個別のスキルや表現方法も異なるということである。こうした点からも、教科等の学習活動において、様々なものをテキストとして意識的に取り上げることは重要である。本研究における授業実践からは、例えば小学校の国語のように、学習活動において様々な種類のものをテキストとして意識的に取り上げることで、異なるスキルや表現方法のトレーニングとなり、多様なテキストに対応した「読解力」向上につながるであろうがえた。

(イ) 「読解力」に関する〈四つの力〉について

PISA調査では、「読む行為」のプロセス(側面)として、①情報の取り出し(テキストに書かれている情報を正確に取り出すこと)、②テキストの解釈(書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり推論したりすること)、③熟考・評価(テキストに書かれていることを知識や考え方や経験と結び付けること)という三つを挙げている。平成15年の調査結果報告では五つあるプロセスを三つにまとめているが、五つのプロセスについて、「テキストを十分に理解するには、これらのプロセスのすべてを必要とする。」と説明している(国立教育政策研究所2003)。文部科学省による「読解力」向上に関する資料においては、「読解力」に関して、文章や資料から「情報を取り出す」ことに加え「解釈」、「熟考・評価」、「論述」することを含むものであり、「考える力」を中核として「読む力」、「書く力」を総合的に高めていくことが重要であるとしている。ガイドブックでは、三つのプロセスに、読み取ったことや考えたことは何らかの形で表現すること等から“表現”を加えて、「読解力」向上のための〈四つの力〉(「情報を取り出す力」、「解釈する力」、「熟考・評価する力」、「表現する力」としている。

本研究で作成した学習指導案では、校種・教科の特性や児童・生徒の実態に応じて、学習活動の中に「情報の取り出し」、「解釈」だけでなく、更に「熟考・評価」を行う学習場面を設定するよう工夫している。ま

た、「表現」についても適宜行うよう工夫している。

実生活・実社会においては、テキストの内容や形式について理解するだけでなく、熟考・評価することが求められる場面が多々ある。PISA 調査の結果でも、我が国の子どもには、「熟考・評価」に課題があることが指摘されている。こうした点からも、学習活動において「熟考・評価する力」を必要とする場面を意識して設定することは重要である。さらに、意図的・計画的に、適切な単元・題材において、学習活動の中に位置付けることは、機会の充実や繰り返しトレーニングすることにつながり、「熟考・評価する力」の向上においては重要である。

また、実生活・実社会においては、取り出した情報や解釈したこと、熟考・評価したことを表現することが求められる場面が多々ある。PISA 調査の結果でも、我が国の子どもには、「自由記述形式」に課題があり、無答率が高いことが指摘されている。

本研究における授業実践からは、例えば中学校の国語のように、学習活動において「熟考・評価する力」や「表現する力」を必要とする場面を意識して設定することで、そうした力をはぐくむとともに、表現する活動において、情報を整理したり再構成したりすることを通して、「熟考・評価する力」をはじめとした他の三つの力の向上につながることがうかがえた。

#### (ウ) その他

本研究で作成した学習指導案の多くに（授業実践では全てに）、グループ活動を取り入れている。グループ活動では、他者に説明する必要が生じることから、「表現する力」だけでなく、そのために情報を整理したり再構成したりすることが求められる。また、他者の説明を聞いたり質問したりすることが必要となることから、それにより様々な考え方を知り、他者の思考過程や意図を読み取ったり、他の方法を考えたりする機会にもなる。このような点で、本研究の授業実践からは、例えば小学校の理科や中学校の数学のように、グループ活動を取り入れることで、四つの力の向上、特に「熟考・評価する力」や「表現する力」の向上、更には学習意欲の向上につながることがうかがえた。

本研究で作成した学習指導案では、ポイントとなる発問を明記するようにしており、また、児童・生徒の実態に応じたポイントとなる助言についても明記するようにしている。特に、児童・生徒が根拠について考え、それを示すことができるようになるために、児童・生徒の実態に応じて発問や助言を工夫している。実生活・実社会では、取り出した情報、解釈したこと、熟考・評価したことを表現する際に、根拠を求められる場面が多くある。学習活動において、根拠を示すように発問や助言を工夫することは、重要である。特に、理由を答えられるようになって、単に「～だから」というだけではなく、それが根拠となっているかどう

かを考えさせるためには、授業者の助言が重要である。本研究における授業実践からは、「理由は？」、「どのように考えて作成したのか？」、「間違えた理由は？」、「どうしたらよかった？」、「考え方や理由を説明できるようにすること。」などの発問や助言を行うことで、例えば小学校の算数のように、四つの力、特に「熟考・評価する力」の向上につながるがうかがえた。

#### (2) 授業実践とその検証

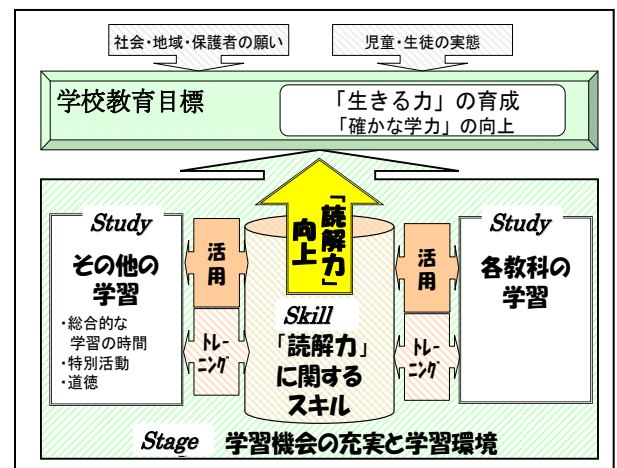
ガイドブックでは、「読解力」向上のための方法として、①スキルモデル、②コンセプトモデルを提示している。具体的には次のようなものである。

##### ①スキルモデル

「読解力」向上に取り組むといっても、具体的にどのようにすればよいかということが課題となる。また、「読解力」を身に付け、活用するためには、そのための方法や手段を学んだり、練習したりする必要があることから、ガイドブックでは“Skill”（一般的には「訓練して身に付けた技能」の意）に着目している。そして、「読解力」のための四つの力に関する「スキル」（技能・方法）を整理したものがスキルモデルである。

##### ②コンセプトモデル

学校全体で「読解力」向上に取り組むといっても、具体的にどのようにすればよいかということが課題となることから、ガイドブックでは学校の教育活動全体の構造に着目している。そして、<Skill>「読解力」に関するスキル、<Study>教科等の学習、<Stage>学習機会の充実と学習環境を<三つのS>として、教育活動全体を構造化し直したものがコンセプトモデルである。（第2図）



第2図 「読解力」向上のためのコンセプトモデル  
（「ガイドブック」より）

本研究では、授業実践を通して、スキルモデル及びコンセプトモデルに係る検証を試みた。

#### ア スキルについて

ガイドブックでは、基本的なスキル及びトレーニン

グ方法を例示している。そして、各学習指導案では、各教科等の目標を達成するための学習活動やテキストに応じたスキルを記載している。具体的な個別のスキルについては、児童・生徒の実態に応じた整理を行うことが重要であるからである。

本研究における学習指導案においても、授業実践を念頭に、児童・生徒の実態に応じた具体的なスキルについて検討を行った。その結果、校種・教科の特性、児童・生徒の実態、使用するテキストに応じて、個別のスキルは異なるものの、共通するスキルが挙げられた。例えば、ガイドブックにも掲載されている、「順序付ける」、「比較する」、「関連付ける」、「分類する」、「予想する、仮定する、推論する」などである。さらに、具体的なスキルとしては、「区別する」（同じ点・共通点、違う点・相違点）、そのためにカードを用いて整理する（グループ化、見出し整理）、キーワードを手がかりとする、「書き換える（置き換える）」などである。

ここでは、「書き換える（置き換える）」ことについて、具体的に見ていくことにする。「書き換える（置き換える）」つまり“変換する”こととは、例えば第2表のようなものである。

第2表 書き換え(置き換え)の例

校種	教科	書き換え(置き換え)の例
小学校	国語	絵 → 言葉      写真 → 言葉 言葉 → 言葉      物 → 言葉
	算数	言葉 → 図(数直線) 図(数直線) → 式
中学校	社会	文章 → 表      表 → 表 表 → グラフ
	理科	現象 → 言葉      言葉 → モデル モデル → 式      式 → 言葉

このように、「書き換える（置き換える）」というスキルは、校種・教科やテキストによって、表現形式や広い意味での扱う言語は異なるものの、校種・教科に共通する基本的なスキルであり、「表現する力」だけでなくその他の三つの力にもかかわる効果的なスキルであることが分かった。また、「書き換える（置き換える）」際には、幾つかの段階を設定することが重要であり、「読解力」向上に効果的であることが分かった。

例えば、中学校の理科では、現象（化学変化）→言葉→モデル（ブロック）→式（化学式）→言葉といったように置き換えるステップを設定している。言葉についても、単語の補充、文の作成、文章の作成へというステップを設定している。また、主体・主語が変わることで、適切な単語を補充することが難しくなる例もあり、立場を変えることも一種の“変換”であり、こうした観点からも、「書き換える（置き換える）」は重要なスキルであることが分かった。

このように、「読解力」向上に関する具体的なスキ

ルを考えることや、スキルモデルとして示したように、教科の枠を超えて基本的なスキルを整理することは、「読解力」向上の取組として重要であり、効果的な方法であることが明らかとなった。

イ コンセプトモデルについて

ガイドブックでは、教科等の学習だけではなく、学校全体で日頃から「読解力」向上を目指す取組が必要であることから、学習機会の充実と学習環境を<Stage>として位置付けている。<Stage>は、学級活動等の様々な機会を活用して「読解力」向上に関する取組を行う、また、日々の学校生活の中で児童・生徒の読む等の機会が自然と増えるように学習環境を充実させるという考え方に基づくものである。

本研究で作成した学習指導案及び授業実践とその成果には、いずれも作成協力者であり授業実践者である調査研究協力員の日頃の学習機会や学習環境の充実を図る取組、スキルトレーニングの積み重ねが背景にある。例えば、児童・生徒の作品を掲示する、朝の会で定期的にスピーチをする機会を設定する、授業等で定期的にグループ活動を取り入れる、などである。これまでの取組を「読解力」の視点から見直してみると、学習機会や学習環境の充実につながるものがあり、これを意図的・計画的に行うことは、「読解力」向上の取組として重要であり、効果的な方法であることが本研究から確認できた。

<Skill>について言えば、ガイドブックで提示したモデルや先に挙げたスキルは、殊更新しいものではないが、だからと言ってどれも簡単に使えるというものではない。PISA 調査において、「読解力」は生きるための「知識と技能」(knowledge and skills)であるとしているように、方法を知識として持っているだけでなく、活用できるようにすることが重要である。

本研究の授業実践から、例えば中学校の社会のように、<Skill>を繰り返しトレーニングすることが重要であり、そのためにも<Stage>と<Study>を見直すことは効果的な方法であることが確認できた。

なお、本研究の調査研究協力員からは、研究を終えて、次のような感想が寄せられた。

「読解力」向上の視点から学習指導案を作成したり授業実践をしたりすることは、全く新しいことに取り組むということではなく、今までの授業を見直すということである。児童・生徒の実態、学習活動、テキスト、発問、指導方法などについて見直し工夫することは、「読解力」向上だけではなく、教科等の目標達成につながるものであるということを児童・生徒の変容から実感している。

## 2 データベース及び校内研修用資料の作成

各学校における「読解力」向上の取組を推進するために、総合教育センターではガイドブックを作成して

配付するとともに、研修講座等での活用を図っている。

各学校での取組を更に推進するためには、研修講座等での活用だけでなく、学校全体での共通理解を促進するための方策や各学校の実態に応じた方策が必要である。実際に、平成19年度の研究や研修講座等での活用などを通じて、学校や個々の教員における「読解力」についての認識や取組状況については差異が大きく、総合教育センターとしての支援の必要性を改めて認識した。そこで、総合教育センターとしての支援の具体的な方法として、(1)学習指導案のデータベースを作成すること、(2)校内研修用の資料を作成することに取り組むこととした。

#### (1) データベースの作成

作成した学習指導案については、校種別・教科別に、学年及び単元・題材名を明記し、一本ずつ個別に Web ページに掲載している。校種・教科等の特性があること、単元・題材の目標を達成するための学習活動において「読解力」向上を図ることが重要であることから、単元・題材のまとまりとして、一本ずつ掲載している。

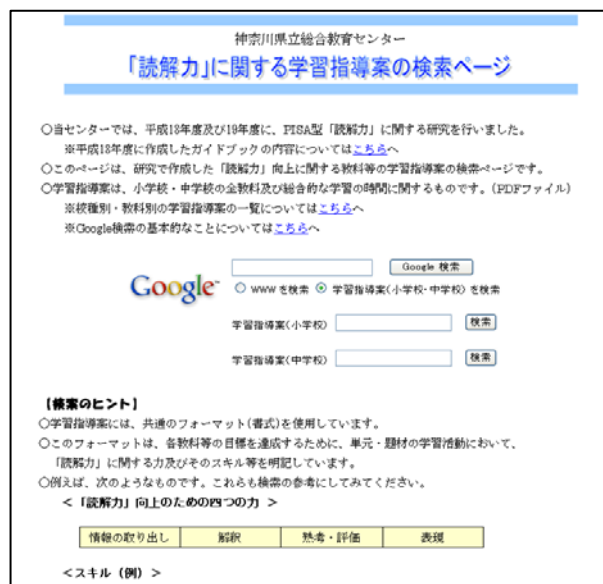
一方で、「読解力」に関する「四つの力」に関する学習活動やスキルの例など、知りたい内容に応じて必要とする情報が選択できるようにすることは、学習指導案の活用、更には学校の実情や児童・生徒の状況に応じた学習指導案の作成につながると考えた。そこで、学習指導案をデータベース化することとした。

データベースの種類は様々であるが、①ユーザーの状況によって必要とする情報が異なることから、全文検索が可能であること、②学習指導案を一本ずつのまとまりとして、検索結果を示すことができること、③今後、新たな学習指導案を追加することも考慮し、費用や技術の面からも作成や運営が簡便であることが必要であることなどから、サイト内検索機能を活用することとした。サイト内検索機能としては、総合教育センターのホームページにも設置している検索エンジン「Google」のサイト内検索として、「フリー検索（ベーシック版）：ウェブ検索 + サイト検索」を活用することとした。（第3図）

具体的には、次のような構成とした。

- ①総合教育センターの Web ページ上に、「読解力」向上に関する学習指導案の検索用ページを作成する。
- ②検索用ページに、サイト内検索ボックスを設置する。総合教育センターでは、使用できるドメインが一つに限定されることから、「読解力」に検索範囲を絞るために、サイト内検索ボックスの中には、画面上に見えない形で、検索するファイルを限定するための語句を予め入力しておく。あわせて、全ての学習指導案を対象とした検索の他に、校種を限定して検索ができるように、それぞれに同様の検索ボックスを設置する。

- ③「読解力」向上のための「四つの力」やスキルに関する検索がしやすいように、「検索のヒント」として、キーワードを掲載する。例えば、「読解力」向上のための「四つの力」として、「情報の取り出し」、「解釈」、「熟考・評価」、「表現」を提示し、スキルに関する言葉としては、「比較」、「根拠」、「ブレインストーミング」等を提示するなどである。また、スキルに関しては、関連する内容をカテゴリー化するようにした。



第3図 検索用の Web ページ

(デザインや内容については随時変更)

#### (2) 校内研修用資料の作成

総合教育センターでは基本研修講座を中心に、ガイドブックを活用した研修を実施しているが、学校の教育活動全体で取り組むためには、各学校の実情に応じた校内での研究や研修も重要である。そこで、学校において、「読解力」向上に関する校内研修を実施するための資料として、ガイドブックを踏まえた校内研修用資料をパッケージとして作成することとした。なお、こうした校内研修用パッケージについては、総合教育センターとして、「校内研修支援パック」という形で、平成20年度から各学校に提供できるように準備を進めている。「校内研修支援パック」は、①利用の手引き、②プレゼンテーション用スライド、③プレゼンテーション用スライドの読み上げ原稿、④研修用配付資料からなっている。

本研究では、基本研修講座や研究発表会などの様々な場面に応じて作成した内容やスライドを基に、研修の進め方について、学校の実情に応じて選択できるように、後に挙げる①～③の三つの段階を想定して、校内研修用資料を作成した。

##### ①ガイドブック入門編（1時間程度）

「読解力」向上の取組についての共通理解を図ることを目的とした内容である。プレゼンテーシ

オン用スライド及びガイドブックを印刷したものを配付資料として活用しながら、「読解力」についての講義を行う。

#### ②学習指導案編（1時間 30分程度）

教科等の学習において、「読解力」向上に取り組むことを目的とした内容である。プレゼンテーション用スライド及びガイドブックを印刷したものを配付資料として活用しながら、学習指導案までの内容について講義を行う。その後、グループ協議用シートを用い、「読解力」向上の視点から授業を見直し、取り組むためのアイデアや工夫について、グループで具体的に考える。

なお、グループ協議については、ガイドブックのフォーマットを使いながら、「読解力」向上の視点を取り入れた学習指導案について、グループで具体的に考える方法もある。

#### ③カリキュラム編（1時間 30分程度）

学校のカリキュラムを作成することを目的とした内容である。プレゼンテーション用スライド及びガイドブックを印刷したものを配付資料として活用しながら、「読解力」についての講義を行う。その後、グループ協議用シートを用い、「読解力」向上の視点から学校のカリキュラムを見直し、取り組むためのアイデアや工夫について、グループで具体的に考える。

なお、いずれも、学校の実情に応じてガイドブックの中から必要な箇所を資料として配付できるように、該当箇所を提示することとした。

### 研究のまとめ

本研究の成果は次のとおりである。

○「読解力」向上に係る新たな学習指導案の作成及び授業実践、並びに授業実践を通じた「読解力」向上の具体的な方法に関する検証

○「読解力」向上のためのデータベース及び校内研修用資料の作成

本研究において新たに作成した10本の学習指導案は、平成18年度に作成した60本の学習指導案では扱っていない単元や学年に関するもので、授業実践を踏まえたより実践的なものとして、「読解力」向上のための取組の参考となるものである。

授業実践を通して、スキルモデル及びコンセプトモデルについての検証を試み、その結果一定の有効性を確認することができた。ただし、スキルに関しては、モデルの一部を検証するとどまった。学習活動や実生活で実践的なトレーニングをする中で、児童・生徒が「テキスト」や「行為」に応じた読解のスキルを個々に選択し、組み合わせたり工夫したりして、いずれは自分なりに適切なスキルを活用できるように支援する

ことが重要である。また、コンセプトモデルに関しては、学校の教育活動全体を対象としたものであることから、本研究の検証は十分とは言い難い。ガイドブック及び本研究が参考となり、各学校での「読解力」向上の取組が推進されるように、研究成果の普及及び学校への支援が一層重要である。

グループ活動に関しては、ガイドブックにおいて、スキルのトレーニング方法のモデルの一つとして、「対話（話し合いの方法）」を挙げている。今後、このスキルトレーニングは重要であり、グループ活動に関する実施形態や方法、評価、支援等についての研究が必要であると考ええる。

データベースについては、作成や管理に特別な費用や技術を必要とせず、ユーザーに応じて、情報が検索しやすくかつ自由度の高いものとなった。今後の課題としては、「検索のヒント」の項目やカテゴリーの見直しが挙げられる。また、ユーザーが必要としているキーワードについての調査を行うことも検討する必要があると考ええる。

校内研修用資料については、普及と活用状況の把握が重要である。

### おわりに

平成19年には、第3回PISA調査の結果が公表された。「読解力」の得点の経年変化については、前回の調査結果と比較すると、日本の得点に変化はなく、「読解力」については引き続き課題がある。なお、平成21年（2009年）には、「読解力」を主要分野とする調査が実施される予定である。

国内においては、平成19年4月に全国学力・学習状況調査が実施され、同年10月に結果が公表された。対象とする教科については、PISA調査の結果も考慮しており、主として「活用」に関する問題を出題する「B問題」はPISA調査を意識したものとなっている。

国内における大きな変動としては、教育基本法及び学校教育法の改正が挙げられる。平成19年6月に公布（同年12月に一部施行）された学校教育法の一部改正により、小・中・高等学校等において、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、①基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐぐみ、③主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」と定められた（番号は筆者）。学力の重要な要素である三つの中で特に②は、「読解力」にも深く関係するものである。

また、平成20年1月に中央教育審議会が新学習指導要領に関する答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を行った。この中にも、PISA調査に関する記述が見られ、改訂における主な改善事項の一つとして、「言

語活動の充実」を掲げている。国語科だけでなく、各教科等において言語活動の充実を図るというものである。「7. 教育内容に関する主な改善事項」の中の「(1) 言語活動の充実」には、具体的な学習活動例が挙げられており、「コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割に関して」は、「話す・聞く・書く・読む」だけでなく様々な行為が例として挙げられている。

このように、現在の学習指導要領においても、次期学習指導要領においても、児童・生徒に「生きる力」をはぐくむためにも、「読解力」向上の取組は必要であり、重要である。

先に挙げた答申の中の「9. 教師が子どもたちと向き合う時間の確保などの教育条件の整備等」の(3)「効果的・効率的な指導のための諸方策」の中に、「特に、教育センターは、教員研修の実施などのほか、カリキュラム開発や先導的な研究の実施、教員が必要とする図書や資料等のレファレンスや提供などを行うことにより、教師の創意工夫を支援することが求められる。」とある(中央教育審議会 2008)。

平成 18 年度に作成したガイドブックについては、参考資料としての配付依頼や問い合わせが本県内外から多数来ており、関心の高さがうかがえる。

本研究が今後の各学校の取組の参考となることを願うとともに、各学校の取組を支援するために更に研究や開発に取り組んでいきたい。

最後になるが、横浜国立大学の高木展郎先生、池田敏和先生には、御多忙にもかかわらず、本研究のスーパーバイザーとして御助言を頂き、心よりお礼申し上げます。また、調査研究協力員の先生方、授業実践の協力校の方々に感謝申し上げます。

[神奈川県立総合教育センター] (各校種・教科担当所員)

カリキュラム支援課

吉田佳恵(中学校国語)、三堀仁(小学校社会)、  
清水広(小学校算数)、濱田伸子(小学校理科)、  
水野治(中学校社会)、山近佐知子(小学校国語)、  
春藤喜一(中学校数学)

専門研修課

平林隆行(中学校理科)

[調査研究協力員]

藤沢市立鵜沼小学校	田中 摂
藤沢市立石川小学校	黒田 邦寿
平塚市立相模小学校	竹内 佳子
厚木市立飯山小学校	金子 達郎
鎌倉市立第二中学校	太田 洋
寒川町立寒川東中学校	小貫 雅明
綾瀬市立綾北中学校	鈴木 久美子
秦野市立西中学校	原 浜三

[助言者]

横浜国立大学 高木 展郎  
横浜国立大学 池田 敏和

## 引用文献

- 神奈川県立総合教育センター 2007 『神奈川県版：「読解力」向上のためのガイドブック』 p. 32  
国立教育政策研究所 2004 『評価の枠組み』 ぎょうせい p. 96  
中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申) p. 141 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf)

## 参考文献

- 神奈川県立総合教育センター 2007 『神奈川県版：「読解力」向上のためのガイドブック』  
国立教育政策研究所 2007 「平成 19 年度全国学力・学習状況調査 調査結果について」 <http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/tyousakekka/tyousakekka.htm>  
国立教育政策研究所 2007 『PISA2006 調査 評価の枠組み』 ぎょうせい  
国立教育政策研究所 2007 『生きるための知識と技能 3』 ぎょうせい  
全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議 2007 「全国的な学力調査の具体的な実施方法等について(報告)」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/031/toushin/06051213.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/031/toushin/06051213.htm)  
文部科学省 平成 17 年 「読解力向上に関する指導資料—PISA 調査(読解力)の結果分析と改善の方向—」 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku/siryou/05122201.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryou/05122201.htm)  
中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)  
横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 2008 『習得・活用・探究の授業をつくる—PISA 型「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメント』 三省堂  
池田敏和 2006 「基幹学力としての学び合う力」(『基幹学力の授業 国語&算数 2006 年 12 月号』 明治図書)  
池田敏和 2008 「『さがす』『えらぶ』『ためす』と『失敗の検討・修正』」(『基幹学力の授業 国語&算数 2008 年 3 月号』 明治図書)  
高木展郎 2007 「言語活動の充実で、生涯を通じて学ぶ力を育成する」(Benesse 教育研究開発センター Benesse 発 2010 年「子どもの教育を考える」特集 日本の学校教育の未来を探る) [http://benesse.jp/berd/berd2010/feature/feature02/takagi\\_01.html](http://benesse.jp/berd/berd2010/feature/feature02/takagi_01.html)  
田中孝一監修 2007 『中学校・高等学校 PISA 型「読解力」—考え方と実践—』 明治書院  
吉田佳恵 2007 「『読解力』向上に関する実践的な研究」(神奈川県立総合教育センター『研究集録』第 26 集)

(URL はすべて平成 20 年 2 月末)